

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 室田 知香

本論文は、光源氏の後半生を描いた若菜巻以後のいわゆる『源氏物語』第二部について、時間と死に抗する愛という主題を中心にすえて、物語が描き出した世界の深さを測り、その達成を平安朝文学史の中に表現史的に定位したものである。構成は、大きく5篇に分かれた14章から成り、さらにその首尾に「序」と「結語」を置く。

第一篇「若菜巻以後の光源氏と物語の原理」は、写実性の深化にともなって光源氏の理想性も相対化されていると評されてきた第二部の光源氏について、その超越的な理想性はなおも不動であることを彫り深く浮かび上がらせ、また関連する史実との精細な比較や物語本文の精緻な分析を通して、この物語における写実性と虚構性との交錯の様相を複眼的に解明し、本論文全体の基礎的考察としている。

第二篇「『源氏物語』の『竹取物語』受容」は、紫の上の死と葬送を「十四日に亡^うせたまひて、これは十五日の暁なりけり」と語る物語本文について、暁を日の変わり目とする日の区切り方があったことを当時の和漢の資料を博搜して明らかにし、八月十五夜の月明のなかでの紫の上の火葬・昇天はまさにかぐや姫の昇天に重ね合わされていることを指摘するとともに、『竹取物語』の人間界とは隔絶した非情の天界を死と等しいものとして受けとめたのは、『源氏物語』独自の『竹取』受容であったことを論証する。

第三篇「平安時代の時間意識と中国文学」は、「古^{ふる}る」と「馴^なる」という愛の変化に関わる二つの時間意識に着目する。「古る」が表すのはその経過とともに愛の凋落してゆく時間であり、「馴る」が表すのは身体感覚をも伴って愛情が増してゆくような時間である。この二つの時間意識をめぐる万葉以来の表現史を丹念にたどり、平安初頭の嵯峨朝における中国文学とりわけ閨怨詩の受容が、この二つの時間に関する思惟と表現を格段に深化させたと論ずる。さらに第四篇「拾遺集・後拾遺集時代の「この世」と来世」では、『拾遺集』『後拾遺集』時代の和歌を通して、浄土思想の浸透がかえってこの世の一回性を愛おしむような意識を胚胎したことを明らかにし、『源氏物語』もそのような意識を共有するとする。

第五篇「『源氏物語』の世界とその文学史的位^ち置」は、紫の上と光源氏との愛が、古りゆく時間をも超越していることを指摘するとともに、紫の上が死を前にして人間存在の孤絶性を見据えながらこの世を哀惜しつつ逝去する様相を捉え、第二部最終帖幻巻の源氏の、紫の上と同様に愛別離苦に堪えながら死を見据え、出家に向けて心を整えようとする峻厳な姿勢のなかに、より人間的に深化した光源氏の理想性を見る。

以上のように本論文は、独自の視点から『源氏物語』の文学的達成を究明しようとした労作であり、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。